

# 匠の群像

「祭りの華」だんじり。威勢の良い掛け声とともに、氏子らがかついで練り歩く姿は見る者をひきつける。「とにかく丈夫なものをつくりたい。いつまでも地域の人に愛されるように」。淡路島・津名町の祭礼用品製造会社「梶内だんじり」の大工、佃明さん（53）は願いを込めながら、だんじり製作に取り組んでいる。

## だんじり大工(津名)

佃さんが初めて新調を任された神戸市東灘区  
のひきだんじり

### 佃明さん

この道に入ったのは二十歳のとき。高校卒業後、三年間働いた食品会社を辞職、その次の日からだんじり大工の見習いになった。父の清さんも家大工。「小さいころから、父の仕事を見てきた。あこがれがあったのかな」。照れくさそうに振り返る。飛び込んだ職場は甘くない。親方からは教わることろか、しかられてばかり。部品の寸法を間違えたときは「四日間、声もかけられず、仕事もくれなかった」。親方に追いつき、追い越したい。悔しさをバネに、見よう見まねで作業を覚えた。木に寸法を書きつけることを「墨つけ」という。木目や色から材質を判断し、

## かついでこそ命宿る

適材適所に部品を取る。一えろ。それだけを考えて本の木から百以上の部品をつくるだんじり大工にとって、墨つけは技量を問われるもっとも重要な作業。寸法が一刀所でも違えば全体に影響が出る。「材料を粗末にするな」。しからねいでもらってなんぼ。祭りにかける人々の思いが、だんじりに命を吹き込むことを、佃さんはだれよりも理解している。

修理や補修も含めて、これまで約八十台を手がけた。ふとん太鼓、ひきだんじりと種類も一通りこなしたが、「一人前になった」とは思っていない。もっと成長したい」と力強く語った。

ことを教わった。平成七年、初めてだんじりの新調を任された。阪神淡路大震災で大きな被害を受けた神戸市東灘区の神社からの注文。だんじりに託された復興への思いを痛感し、いつも以上に力が入った。「丈夫なものをこしら

(洲本支局 宝田良平)



「地域の人に愛されるだんじり」を目標に、作業に励む佃さん

### 華やかに演出

【XMO】だんじりは山車(だし)の一種に定義されるが地域によって呼び名も様々。淡路島のだんじりは、屋根の部分にふとんを重ねた「ふとん太鼓」やひきだんじりが一般的だ。主に使われるのはケヤキで、骨格は大工が担当。彫り師が、至るところに源平合戦などをモチーフにした装飾を施し、最後に専門の刺繍(ししゅう)職人がつくった「飾り幕」を周囲に取り付け、華やかに演出する。

